

特集

福祉学習&ボランティア体験学習を始める際の、先生向けチェックリスト!

本年度から本格実施となった「総合的な学習の時間」によって、福祉学習やV体験学習を授業に取り入れる小・中学校が増えてきました。

「どうやって取り組んでいいのかわからない」「いざ取り組んではみたが、なかなかうまくいかない」とお悩みの先生も多いはず。そこで今回の特集は、Vコーディネーターに寄せられた「よくある」相談事例をもとに、福祉学習&V体験学習に取り組む先生向けのチェックリストをまとめてみました。

「気づかぬうちに、こんなことをしていないか」。ぜひご自身の取り組みをふりかえってみませんか。



取り組むにあたって

◆Vコーディネーターのつばやき◆

ケース1 「Vコーディネーターに全てお任せ」

ある小学校の先生から、「福祉教育プログラムを立てることになったが、初めて取り組むのでよくわからない。とりえず、お任せするのでVセンターでプログラムをつくってほしい」との相談があった。

◆Vコーディネーターのつばやき◆

ケース2 プログラム内容・日程をすべて決めてから、相談に来られても……

「障害者とお年寄りへの理解を目的に、月日に車いす体験を行いたい。ついては当事者団体との調整をお願いしたい」との相談がありました。場合によっては内容をふくらませたり、日程を変えても良いかと聞くと、「指導案として決裁をもらっているので変更は無理」と言われてしまいました。

◆Vコーディネーターのつばやき◆

ケース3 みんな平等に体験をさせようとしても……

中学2年生の学年主任から「老人福祉施設での1日V体験を考えている。一学年約100名の生徒を受け入れてくれる施設を紹介してほしい」との相談がありました。そんな大人数を同時に受け入れられる施設はないのですが……

◆先生からの相談◆

ケース4 修学旅行先でV活動をしたい

A先生「修学旅行先で、子どもたちにV体験をさせたいと考えています。各名ずつ計班で計画していますので、受け入れ先をいくつか紹介していただけませんか」

B先生「学校でのV活動を始めるきっかけとして、修学旅行先で子どもたちにV体験させたいと考えています。どんなプログラム内容がよいでしょうか」

先生向け



いざ、取り組んではみたものの……

◆先生からの相談◆

ケース5 とりえず収集活動を始めたけれど……

小学校のV担当教員です。半年前から学校全体の取り組みとして「使用済み切手とプリペイドカードの収集」を行ってきました。子どもたちの頑張りのおかげでかなりの量が集まったので、そろそろ送ってあげたいと思います。日本でも海外でもかまいませんので、どこか良い送り先を教えてください。

チェックポイント

そもそも福祉学習とは何かを先生自身が理解し、そのうえで、子どもたちに「何を伝え・何を感じてほしいか」先生自身の目的がはっきりしていますか。

取り組み方がわからないからといって、プログラムづくりから参加人数・日程・場所の調整まで、すべてをVコーディネーターにお願いしていませんか。

とりえず「車いす・手話・点字を」と、安易なプログラムを用意していませんか。

地域のボランティアや当事者、施設など、V活動や体験学習を行うには常に協力してくれる相手が必要です。活動内容や参加人数・日程などをすべてを決めてしまう前に、早めにVセンターなどに相談していますか。

受け入れ状況など、施設の都合を考慮していますか。

施設は人が暮らしている所です。そこで生活を送っている入所者や現場スタッフの気持ちを考えてみましょう。そのうえで、「V活動とは何か」「施設での留意事項や約束事」など、あらかじめ子どもたちにオリエンテーションを行っていますか。

V活動は特別なものではありません。そもそもなぜ修学旅行でV活動をさせる必要があるのか、V活動の意味をもう一度確認してみたいかがですか。

V活動は「地域の身近な場所」で、「誰もが、いつでも」始められるもの。まずは、自分の地域で始めてみたいかがですか。

◆先生からの相談◆

ケース6 プログラムに発展がない

小学校4年生の担任です。点字グループをお招きし、点字を教えていただく福祉プログラムを昨年行いました。子どもたちの感想文には「初めての体験で面白かった」「もっといろんな言葉を覚えたいと思った」など書いてあったので、今年も同じ取り組みをしました。ところが続けるうちに、子どもたちの意欲が失せてきてしまいました。

◆Vコーディネーターのつばやき◆

ケース7 先生がすべてお膳立てしてしまう

先日、ある小学校の先生から「クラスで福祉マップを作りたい。今週木曜日、児童3名でVセンターに行くように指示している。ついては、私が作った質問をファックスするので、児童が来たら答えてあげてほしい」との電話がありました。当日、子どもたちが来たのですが良く理解していないようなので、どんな具合に進めているか聞いてみると、先生が子どもたちの役割分担や連絡調整などをすべて決めてしまっているようでした。

◆Vコーディネーターのつばやき◆

ケース8 事前の打合せがない

「授業の調べ学習で、この10年間のV活動状況をまとめることになったので、資料はあるでしょうか」と中学校生徒がVセンターを訪ねてきました。その後、同じ中学校の生徒が次々とセンターを訪れたり、電話をかけてくるなど、同様の質問にも関わらず個別の対応となって困っています。

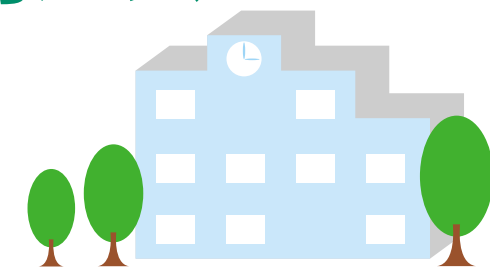


取り組みを終えて……

◆先生からの相談◆

ケース9 振り返りのまとめ方がわからない

「福祉のまち」をテーマに、クラスで班に分かれ、地域に出てバリアフリーの状況や障害者が利用しやすいお店などの調べ学習を行いました。後日、「振り返り」の時間をもち、子どもたちから学習の感想を聞いたところ、意見が様々で一体どのようにまとめていいのかわからず困ってしまいました。



チェックポイント

例えば、点字体験であれば、ただ「点字を覚える」だけでなく、視覚障害者への理解、点字が社会でどのように役立っているかなども理解したいものです。まずは、その取り組みを「何のために」行うのが「目的」を明確にしたうえでプログラムづくりを行っていますか。

子どもは年々成長していきます。ただ同じプログラムを繰り返すのではなく、入門的なものから、今度は当事者やVグループなどのお話を取り入れたり、地域に出てバリアフリーの状況を調べる学習へつなげるなど、発展性のあるプログラムを考えていますか。

「何をさせてあげたいか」ではなく、子どもたち自身が「何をやりたいか」。先生と生徒が一緒になって企画を立ててみたり、子どもたちが自主的・主体的に企画を進めるような雰囲気をつくっていますか。

段取りからアイデア出しまでをすべて先生がするのはなく、子どもたち自らが施設やVセンターに相談に行けるような雰囲気をつくっていますか。

学年全体あるいは学校全体で、Vについての情報を共有していますか。

子どもたちが訪れるにあたって、Vセンターや施設、Vグループなどに対して事前の打合せを行っていますか。

チェックポイント

福祉体験やV活動を、一つのイメージで無理に結論付けようとしていませんか。

先生が感じたことを子どもに押しつけようとしていませんか。

子どもたち一人ひとりの「気づきや思い」を大切にしていますか。

子どもたちが自分で感じたことを「感想文」や「記録」として残していますか。

より効果的に 福祉学習&V体験学習を 進めるために!

より効果的に福祉学習やV体験学習を進めるうえで、先生にぜひ心がけていただきたいことをポイントでまとめてみました。ワンランクアップの福祉学習・V体験学習をめざして、ぜひ実践してみましょう。

1 まずは「ねらい」をはっきりさせよう

先生のねらいが明確であれば、Vコーディネーターも「こうした視点でこうしたプログラムはいかがですか」「そのためには、こんなVグループや施設がありますよ」と提案しやすいもの。「車いす体験や施設でのV活動をしたい」など取り組みイメージを固めたり、あるいは「何でもいいから活動を紹介して」ではなく、そもそも子どもたちに「どんな気づき・発見をしてほしいのか」を先生自身が持つておくことが大切です。

2 身近な場所で始めてみよう

地域にはVセンターをはじめ、様々な機関や施設がありますし、多様なVグループが活動を行っています。まずは地域の資源を有効に活用しながら、身近な場所で活動を始めてみましょう。そのためには、先生自身が地域に出て、どんな資源があるのか探してみることも大切です。

3 事前の打合せをしよう

子どもたちの自主性を考え、子どもたち自身がVセンターや施設・Vグループに直接連絡を入れるよう指導されている先生もいるかと思いますが、その場合、あらかじめ先生の方から「どんな内容で何名ほど来るのか」Vセンターに連絡があれば、そのための資料も用意できるし、子どもたちが間違った質問をしても軌道修正してあげることできるでしょう。Vコーディネーターとしても先生とのコミュニケーションを深めるチャンスになります。

また、事前の連絡を密にすることで、先生の意図や想いがよりVコーディネーターに伝わるので、子どもたちにとっても効果のある学習へとつながるでしょう。

4 先生も一緒に体験しよう

先生の中には、まだ一度もV活動を経験したことがない、あるいは子どもたちがV体験をしているのに先生自身は現場で引率をするだけで、実際には活動に参加していない、ということもあるようです。

子どもたちを活動に連れてくる時は良い機会です。ふだんの先生という立場を離れ、子どもたちと一緒にV体験してみましょう。

5 体験後の報告は忘れずに

活動を通して、子どもたちと関わった地域のボランティアや大人たち、あるいは施設での体験であれば、入所者や現場スタッフのみなさんは、「子どもたちが活動を通して何を感じたか」聞きたいもの。感想文やお手紙じゃなくてもよいので、Vコーディネーターに活動後の報告をしてください。そうすれば、皆さんにも子どもたちの想いをお届けします。

6 学校全体でプログラムを計画しよう

子どもたちが意欲的に取り組めるものにするためには、プログラムの内容に発展性があることも重要です。しかし中には、各担任教員が個別にプログラムを考えてしまったり、学年間での調整を行っていないため、同じ学校でありながらプログラムの内容に差異が出ている学校もあるようです。

福祉学習にどのように取り組むのか、考え方や方向性を学校全体で共通理解したうえで、プログラムを企画・立案していくことが必要です。

7 V担当者を決めよう

VセンターからV担当の先生に伝えれば、学校全体に伝わる。同時に、V担当の先生を通して、Vセンターも学校の流れを把握できるよう、「V担当窓口」を決めましょう。これは、Vセンターと学校との情報交換がスムーズになるばかりでなく、Vコーディネーターにとっても学校全体の取り組みを把握することができ、より広がりのあるプログラムの提案につながるでしょう。